



テュートリアル課題 あんなに元気だったのに

著者名	東京女子医科大学
雑誌名	テュートリアル課題
巻	2016
号	S6
発行年	2016-10-20
URL	http://hdl.handle.net/10470/00032697

2016年度 Segment. 6

課 題 No.4

課題名：あんなに元気だったのに

課題作成者：脳神経外科学
脳神経外科学
脳神経外科学

佐々木 寿之
新田 雅之
川俣 貴一



無断で複写・複製・転載すると著作権侵害となる場合がございますのでご注意ください。

シート1

河田達也（54才）は会社を経営していて、毎日睡眠時間を削って忙しく働いています。娘の春菜さんは女子医大の3年生で両親と弟と一緒に都内で暮らしています。達也さんは、今までほとんど病院にかかったことがなく、高血圧がありますが特に治療は受けていません。朝5時ごろ、春菜さんは2階でバタンと倒れる音を聞きました。2階に上がるとトイレの前で達也さんが意識を失って倒れていました。

シート2

春菜さんが呼びかけると、達也さんは目を開け、「だいじょうぶだよ・・・」と何とか返事はできました。右手は握る事ができますが、左手足は動きません。目を開けてもまたすぐに眠ってしまいます。

2016-S6-T2-4

あんなに元気だったのに

シート3

春菜さんはすぐに救急車を呼び、達也さんはすぐに東京女子医大に搬送されました。救急救命センターにて、バイタルチェック、神経所見チェック後、血液検査および頭部CTが行われました。

シート4

脳神経外科にコンサルトとなり、くも膜下出血と診断されました。春菜さんとお母さんは担当医に呼ばれ、
「緊急手術が必要です。」と言われました。

シート5

同日、緊急開頭クリッピング術および脳内血腫除去が行われました。
担当医は、「手術は成功して動脈瘤はきちんと処理出来ました。でも、この病気はこれから数週間が大変で、
様々な合併症のリスクがあります。」と説明しました。

シート6

急性期が過ぎ、達也さんには左片麻痺が残存しました。リハビリを開始しましたが、術後3週目ごろから徐々に眠りがちとなり、反応が鈍くなってきました。そして会話も辻褄が合わなくなりました。

シート7

頭部CTおよび脳脊髄液排出テストで正常圧水頭症と診断され、脳室腹腔短絡術が施行され、達也さんの傾眠症状は改善しました。左片麻痺が残存していたため、達也さんは回復期リハビリ病院に転院しました。春菜さんは、お父さんが社会復帰できないと今後の生活はどうなるのだろうと心配になりました。